

論文

蕭紅「呼蘭河伝」について

About Xiao Hong's 「The story of Hulanhe」

後藤岩奈*

GOTO Iwana

1 はじめに

中国の東北部、黒龍江省ハルビン市の街の中心部から北に約25km、鉄道で約30分、自動車です約1時間の所に呼蘭という街がある。市街地の西南には呼蘭河が流れている。この街は、以前はその行政単位は黒龍江省呼蘭県であったが、2004年からは市轄区となり、ハルビン市呼蘭区となっている。この呼蘭の街を描いた文学作品に、呼蘭出身の女流作家蕭紅の「呼蘭河伝」がある。

筆者が初めて蕭紅の名前を知ったのは、学生時代に島田政雄著『中国新文学入門』を読んだ時で、東北出身の作家でハルピンと関係がある、ということを知った程度であった。その後、1997年に筆者は県立新潟女子短期大学に赴任した。新潟県と黒龍江省は友好提携を結んでおり、毎年、学生の語学研修の引率でハルピンを訪れるようになり、ハルピンという街、それに隣接する呼蘭という街が身近に感じられるようになり、親近感というか、その存在が気になっていた。機会があれば呼蘭を訪れてみたい、「呼蘭河伝」を読みたい、と思っていた。またそれは、北東アジア（環日本海）地域の文化交流にもなり得ると思っていた。さらに、これらとは別の次元のことであるが、筆者自身、自分の故郷、郷土、自分が生まれ育った地方、地域を文学作品として表現すること、およびその方法に関心を持っていた。以上のようなことから、蕭紅の「呼蘭河伝」に取り組もうと考えた。

本稿では、第2章で蕭紅の経歴を見てゆき、第3章で「呼蘭河伝」の内容を要約する。第4章では作品読後の筆者の所感を述べ、第5章では蕭紅研究者である平石淑子氏の著書『蕭紅研究—その生涯と作品世界』より、「呼蘭河伝」の評価、分析に関する内容を見てゆく。第6章では、蕭紅はどうして自分の故

* 新潟県立大学国際地域学部 (iwana@unii.ac.jp)

郷を文学作品として描こうとしたのか、またどのように描いているか、その動機と方法について、筆者なりに考えたことを述べてみる。

2 蕭紅の経歴¹

蕭紅、本名張廼瑩は、1911年旧暦5月黒龍江省呼蘭県に生まれた。父は張庭挙、母は姜玉蘭で、地主の家庭であった。8歳の時に実母が死に、継母梁亜蘭をむかえるが、蕭紅は父、継母よりも、祖父張維禎の愛情を受けることになる。

1920年、9歳で呼蘭県立第二初級小学校に入学、24年に第一初高両級小学に転校、王恩甲と婚約する。翌25年には5・30事件に抗議のデモに参加している。27年、父の反対を押し切りハルピンの東省特別区第一女子中学に入学、魯迅などの五四新文学に触れ、美術や社会問題にも関心を持つ。28年には満蒙五路建設反対運動に参加している。その後、一時期北京にゆくが、31年春、ハルピンの東興順旅館で婚約者王恩甲と同棲、妊娠する。

1931年9月満州事変が勃発、32年3月には満州国が建国される。その後王は姿を消し、蕭紅は体調を崩し、旅館部屋代未払いのため妓楼に売られそうになり、「国際協報」社に手紙を出して救援を求める。7月、蕭軍ら左翼作家たちが彼女を訪ねる。8月、松花江の洪水に乗じて蕭紅は蕭軍らと旅館を脱出、子供を出産するが、人の手に渡すことになる。

蕭紅は欧羅巴旅館で蕭軍との同居を始め、左翼作家たちとも交流することとなり、作家として出発する。美術や演劇活動にも参加する。32年の冬からは商市街に住む。33年10月、蕭軍との共著である小説集『跋涉』を出版するが、直後に発禁となる。身の危険を感じた二人は、34年6月にハルピンを離れる。

1934年6月、二人は大連経由で青島にゆく。蕭軍は「青島晨報」の職につき、蕭紅は9月に東北農民の抗日闘争を描いた小説「生死場」を脱稿する。二人は魯迅に手紙を書いて面会を希望し、「青島晨報」が閉鎖されると、11月に上海へとゆき、その後、魯迅との交流が始まる。35年5月、ハルピンの欧羅巴旅館で蕭軍と同居を始めてからハルピンを離れるまでのエピソードから成る散文集「商市街」をまとめる。魯迅の評価と尽力により6月には蕭軍の「八月的鄉村」、12月には蕭紅の「生死場」が出版される。36年7月、蕭紅は病気養療と日本語学習のため日本の東京へゆく。8月上海にて『商市街』を出版、10月には魯迅の死を新聞で知る。37年1月に帰国する。上海滞在の頃から、蕭紅と蕭軍の感情的矛盾が増大してゆく。

1937年7月、日中戦争が勃発し、上海に日本軍が迫ると、蕭紅は蕭軍とともに武漢に避難する。12月、二人は国民党特務に捕らえられるが、董必武に救出される。38年2月、友人のすすめで二人は山西省臨汾の民族革命大学へとゆくが、蕭軍は抗日遊撃隊への参加を希望し、蕭紅は「西北戦地服務団」に参加し、西安で離婚する。38年4月武漢に戻った蕭紅は作家端木蕻良と結婚する。日本軍が武漢に迫ると、9月に重慶に逃れ、男児を出産するが死亡する。端木は復旦大学の教員となる。

1940年1月、蕭紅は端木蕻良と香港に行くが、直後に体調を崩す。この年「馬伯楽」を書き始め、12月には「呼蘭河伝」を脱稿する。41年1月に「馬伯楽」第一部を出版。7月肺結核と診断される。11月病状が悪化、12月太平洋戦争が始まる。42年1月、香港島の養和病院で手術をするが、後に誤診と判明する。1月22日、赤十字の臨時病院聖士堤反女校で友人駱賓基に見守られながら死去する。享年31歳であった。

3 「呼蘭河伝」の内容要約²

第一章では、呼蘭河の街の様子が描かれる。³ 冬の大地の描写から始まる。

厳しい冬が大地を覆う頃、大地は至るところで口を開ける。南から北まで、東から西まで、何尺もの長さのものも、一丈ほどのものも、さらに何丈もの長さのものも、方角もかまわずに、時ところをかまわず、厳しい冬が訪れると、大地は口を開けた。⁴

人々の姿。豆腐屋、マントウ売り、広野を行く人馬。大豆やコウリヤンを売り、油、塩、反物を持ってゆく。

呼蘭河はつまりこのような小さな县城であり、この小城は決して繁華などころではなく、二本の大通りがあるだけで、一本は南から北へ、一本は東から西へ、そして最も有名なのは十字路ということになる。十字路の入口には全城の精華が集中していた。十字路には、貴金属の装飾店、反物屋、油屋、塩屋、お茶屋、薬屋があり、歯を抜く西洋医者もあった。この医者の門口にはとても大きな看板が掛けてあった。その看板には特に大きな、升ほどの大きさの歯が並んで描いてあった。この看板はこの小城にはたいそう似つかわしくないようで、人々はそれを見ても、どんなものか分からなかった。

た。⁵

十文字になった通り、東通り、西通りがあった。東通りには火力製粉工場があった。二つの小学校があった。一つは竜王廟にあった農業学校で、一つは祖師廟にあった高等小学校であった。西通りには城隍廟の境内に回教の学校があった。

東通りには、深さ五、六尺の大きな泥の穴があった。荷馬車の馬が穴にはまると、身動きできなくなる。人々は、馬を掘り出そうとする者、手を貸す者、見物する者、さまざまである。馬が助け出され生き延びても、「みなで噂するときには死んだことにしてしまう。もしそう言わなければ、この大きな泥穴の威厳がなくなってしまうように思っているのである」。

ある大雨の日に子供が穴に落ち、救い上げられると、農業学校の校長の息子であった。人々は、「農業学校は竜王廟にあるので、竜王様の怒りに触れたのだ」「校長は教室で生徒たちに、竜王様などいないと教えている」「生徒はひどいもんだ」「今どきの学校はまったくなくてない」と、本題から外れてゆく。晴れた日が続くと、穴は干上がりそうになる。「一年の間に、車や馬を担ぎ出すようなことがこの穴で何度起こったか分からない。しかし穴を埋めたらいいじゃないかと言う者は一人もいなかった。ただの一人も」。

泥の穴で子豚、犬、猫、鶏やアヒルが溺れ死んだ。市場に突然安い豚肉が出る。人々は、穴で豚が死んだのか、コレラで死んだ豚なのか、議論し合う。ある家では、子供が母親が言ったように「コレラの豚だ」と外で言い、母親に打たれる。

泥の穴が土地の住民に与えている利点は二つある。一つは、住民たちに暇つぶしのたねを提供できること。二つ目は、コレラの豚を溺れ死んだ豚にすることができるから、みんなが肉を買える。経済的で、衛生的でもある。

東通りには粉屋、豆腐屋、機屋、染物屋があった。モヤシ売りの王後家は、ある年の夏、一人息子が河で溺れて死に、以来頭がおかしくなったが、モヤシを売ることは忘れない。街の人々は、不幸な人々を、狂人、白痴とひっくるめて扱う。びっこ、盲人、狂人、白痴など、みな乞食をしていた。まるで彼らには「生きていることに一文の値打ちもない」ような扱いであった。モヤシ売りの女は「やはりひっそりと生きていた」。

染物屋では、ふたりの小僧が街の女を取り合って喧嘩し、一人が甕につつまれて死に、一人は無期懲役になった。豆腐屋のふたりの小僧が喧嘩し、碾き臼のロバの足を折る。小僧の母親は目を泣きつぶす。紙屋では父なし子が飢え死にする。葬儀屋には張子の屋敷が置いてある。豪華なものだが、屋敷の主人

がない。葬儀屋はとてもちらかつていて、仕事をしている人たちは粗末な飯を食い、粗末な着物を着、いかにもひどい暮らしである。「こんなに綺麗できらびやかで、まるで生きているような人形が、彼らの手によって作られるとは、ほとんど信じられないのである」。

生、老、病、死、いずれも何も表さない。生まれたら、その自然にまかせて成長してゆく。成長するものは成長し、成長できなかったら、それまでである。⁶

もしも誰かが彼らに、人生とは何のためのものか、と尋ねたら、彼らはぼうっとして答えられない、ということはある得ない。彼らは深く考えることなく、「人が生きるのは、飯を食い服を着るためさ」と言うであろう。

さらに、人が死んだら、と尋ねたら、彼らは「死んだらおしまいさ」と言うであろう。

そのため、葬儀屋の職人が生きているときに、彼が自分のために紙の墓を作るのを見た人はいない。おそらく彼はあの世を信じていないのだろう。もしもあの世があったら、その時になって、彼は葬儀屋を開くのに、また人の家を借りなくては、と思うのである。⁷

横丁には焼餅売りがまわる。三十過ぎの女と五人の子供は、麻花の奪い合いで騒ぎを起こす。涼粉売りは時計のように正確に四時か五時になると必ず来る。

日暮れが近づくと豆腐屋である。豆腐屋が終わると一日の行事が終わる。夕焼け雲が出る。馬、犬、獅子の形に変わり、雲は消える。人々は家に帰って寝る。

カラスの群れが呼蘭河の南岸の森に帰る。空には大昴星がのぼり、天の川や月ものぼる。こうもりも飛ぶ。

春夏秋冬、一年四季はめぐりめぐって過ぎてゆく。昔からこうであった。風霜雨雪、耐えられる者は過ぎ去り、耐えられない者は、自然の結果を探すことになる。その自然の結果とはあまりよいものではなく、一人の人が黙々と、一言もなく牽かれてゆき、この人間の世界から離れてゆくのである。

まだ牽かれて行っていない者は、風霜雨雪、なおもこの人の世で吹きさらされている。⁸

第二章では、街の盛大な行事について述べられる。⁹

神おろし（跳大神）。神おろしをやる巫女は病気を治すことができる。赤いスカートを身につけると全身が震えだす。炊いた線香が半分くらいになると神かかりになる。もう一人の男のお供が太鼓をもって語り始める。巫女が荒れ始めると、家の者たちは赤い布を位牌にかけ、鶏をつぶす。神おろしが済むと両方とも巫女のものになる。

病気を治すために神おろしを頼んだ家で、その病人が治ったかどうかは分からない。隣近所の人たちが思いをつのらせ、ため息をついて一晩中やむことがないのは、よくあることである。

空には星の光が満ち、部屋には月の光が満ちている。人生はどうして、なぜ、こんなにも悲しいのだろうか。（中略）

その太鼓の音は、まるでわざとあの不幸な人を呼び起こしているように、激しく、またゆっくりと打たれる。それはまるで一人の道に迷った人が、夜中に彼の惑いを訴えるかのようであり、あるいはまた、不幸な老人が、幸せだったごく短い幼年時を回想しているかのようであり、あるいはまた、優しい母親が、息子の遠い旅立ちを見送っているかのようである。あるいはまた、なんとも離れがたい、生別死別のようでもある。

人生は何のために、こんなにも寂しい夜があるのだろうか。¹⁰

七月十五日の于蘭盆会の灯籠流し（放河灯）。七月十五日は亡者の祭日で、無実の罪や、この世に怨みを残してあの世にいった亡者たちは、この日灯籠に取りすがることができたら生まれ変われる、とされている。そのため七月十五日生まれの子供は嫁に行けない、嫁が来ないと言われている。ただし金持ちは別である。この日、僧侶や道士たちは笛を吹き、太鼓を打ち、経文を唱える。呼蘭河の上流から灯籠が流れて来る。

この灯籠が流れて来るとき、キラキラとひかり輝いており、さらに数多くの見物人たちがいて、この光景は実に壮大なものである。河を流れる灯籠の多さといったら、数えきれないくらいで、おそらく数百数千はあろう。兩岸の子供たちは拍手喝采し、地面を踏みしめて歓迎する。灯籠の光に照らされて、水面は静かに光り、水の上には空の月光が飛び跳ねている。実に、人の生涯にこんなにも美しい光景があろうとは。¹¹

灯籠は、流れ流れて、一つ一つ消えてゆく。遙かかなたへと流れてゆくと、見ている人々の心に空しさが押し寄せる。三更（午前零時）を過ぎると、川原には一人もいなくなり、灯籠も見えなくなる。

村芝居（野台子戯）。作物の出来がよいと、芝居をやって天地の神に感謝する。夏、日照りの時は雨乞いをする。雨があると、その秋に必ず芝居をやる。願をかけたので、願を解かなければならない。芝居は三日間続く。芝居の舞台ができる頃には、親戚、友達を呼んだり、嫁に行った娘、婿を呼んだりと大変な騒ぎである。そして年頃の男女を見合いさせる。芝居見物の娘はめかしこむ。人妻となっている若い女もめかしこむ。親戚が一堂に会して、夜まで話しこむ。娘たち姉妹も交流する。土産物を持って来て、嫁ぎ先に帰る時も土産物を持ってゆく。

芝居見物で、めでたい話がまとまる。親同士が腹の中の子供の縁組をすることもあり、「指腹婚」（指腹為親）という。これはかなり資産がある者がやるもので、悪い点の方が多い。一方の家が落ちぶれると、一方の家は子をやりたがらない。女の家が落ちぶれるとまだいいが、男の方が貧乏になり、女の方がつっぱねると、その娘の名誉はまるつぶれとなる。女が「妨げ」で没落させて、嫁に行かない、と人々に言われ、「許婚に死なれた嫁」（望門妨）と呼ばれる。やむなく嫁ぐと、家の者、夫、舅、姑からいびられる。実家に帰ると実の母からも「これはお前の運命だから、我慢するんだよ」と言われる。このため井戸に飛び込む、首をくくることになる。節婦の碑には、なぜ井戸に飛び込んだ娘の勇敢さを讃える言葉が書いてないのか。建立する人が故意に省くからである。建立するのはたいてい男で、いつか妻を殴った時、妻も井戸に飛び込むかもしれないのが、恐ろしいのである。

芝居を見る見ないは別として、人々は舞台の前に来ないわけにはいかない。芝居を見に来たことを忘れてしゃべりまくり、男も女も世間話に夢中になり、喧嘩になって、芝居見物のはずが自ら芝居を演ずることになる。舞台の役者は動ずることはない。

見物人の中には色事にうつつをぬかす者もいる。互いに秋波を送りあう者もいる。上流階級の紳士は友人の令嬢に心を動かしてはいけない。車で芝居見物に来た者は、川原の砂原で焚き火をして夜を過ごす。車夫、御者は馬の番をしてバクチを打つ。

四月十八日の娘娘廟大祭。これは神や亡者のためのもので、人間のためのものではない。この縁日には女たちは化粧をして出かける。迷子がたくさん出る

ので、巡査も出る。人々はまず老爺廟（関帝廟）に行き、次に娘娘廟にまわって、子供や孫を授けてもらうよう参拝する。老爺廟には大きな泥の神像が十いくつがある。

泥の人形を作るのは男であり、彼は女の人形をとて温厚そうに作る、それはまるで女性を尊敬しているかのようだ。彼は男の人形をとて凶暴そうに作る、それはまるで男性はどうもよくないと考えているかのようだ。しかし実際にはそうではなく、世界中の男がどんなに凶暴であろうとも、目から火を吹くのは未だかつて見たことがない。（中略）それでは泥の人形を作る人は、なぜあのような姿に作るのだろうか。それはつまり、一見して見る人を恐がらせるためであり、額づくだけでなく、心から服従させるためである。額づいて、立ち上がって見ても、決して後悔することはなく、ごくごく平凡な者に向かって無駄に額づいたと後悔することはない。泥人形を作る人が女性を作るとき、なぜあのように温厚そうに作るかに至っては、温厚ということは大人しいということで、大人しいということは騙しやすいということを知っているのであり、はやく女たちを騙すよう人に知っているのである。（中略）男が女を殴るのは理の当然、誰もが認めていることだと分かる。どうりで、あの娘娘廟の娘娘が特に温厚そうであるのは、もともとしょっちゅう殴られていたからなのである。温厚そうに見えるのも、優れた天性というものではなく、殴られた結果であり、あるいはそれがまた殴打を招く原因でもある。¹²

出店では不倒翁が売られている。頭のとっぺんに毛がはえたやつを欲しがる子供。子種に恵まれない女たちは帯を買う。嫁入り前の娘が買っていると笑われる。不倒翁は家の外から見える所に置き、縁日に出かけた証拠とする。

第三章では、「祖父」「祖母」が描かれる。¹³

祖父は私が生まれた時、六十を過ぎており、私が四、五歳の時、七十近くであった。私の家には大きな裏庭があった。

この裏庭には、蜂、蝶、トンボ、バッタなど、何でもいた。蝶には白い蝶と黄色い蝶がいた。これらの蝶はとて小さく、あまり綺麗ではない。綺麗なのは大きな赤い蝶で、身体じゅうに金粉をつけていた。

トンボは金色で、バッタは緑色で、蜂はぶんぶんと飛び回り、身体じゅう

短い毛に覆われていて、花にとまると、丸々として小さな毛玉のようになり、動かなくなった。¹⁴

この裏庭は、以前は果樹園だった。羊も飼っていた。榆の木もあった。

祖父は一日じゅう裏庭にいた。私も祖父のあとについて裏庭にいた。祖父は大きな麦わら帽子をかぶり、私は小さな麦わら帽子をかぶっていた。祖父が花を植えると、私も花を植えた。祖父が草を抜くと、私も草を抜いた。祖父が白菜の種を蒔く時、私はそのあとについて、種を蒔いた土のくぼみを、一つ一つ足で踏みならした。そこはしっかりと踏まなくてはならないのであるが、あっちを踏んではこっちを踏んでと、でたらめに踏みつけた。ある場所は、種に土がかぶさっていないどころか、種を蹴飛ばしていた。¹⁵

裏庭では、白菜、エノコログサ、キュウリ、カボチャが採れた。

祖父はいつもにこにこ笑っていた。よく子供をからかって帽子を隠した。財の管理ができず、家は祖母が取り仕切っており、祖父は一日中ぶらぶらしていた。私が三歳の時、祖母に針で指を突かれた。それ以来、祖母が嫌いになった。私の咳がひどい時、祖母は豚の腎臓を食べさせてくれたが、やはり嫌いだった。

祖母は祖父に錫の道具を磨かせていた。よく小言を言い、祖父のことをグズ、私のことをグズ娘と言った。

裏庭にはバラが一株あり、五月には咲いた。私はバラの花びらを摘み、しゃがんで草取りをしている祖父の帽子にのせる。祖父が「この春は雨が多かったので、うちのバラがよく匂うなあ」というのを聞き、大笑いする。気づいた祖父も大笑いする。

私の家族は五間続きの家に住んでいた。祖母の部屋には孔雀の羽、娘の絵の描かれた置時計などがあったが、触らせてもらえなかった。納戸にはいろいろなものがあった。鉄のトウモロコシ、時計の中の小人、絵の具粉、観音粉、虫眼鏡、葡萄の蔓の腕輪など、私が引っ張り出すと、祖母は三人の娘の思い出にひたっていた。

翌年の夏、裏庭で蕻を作った。祖母は蕻入りの餃子が好きだった。祖母の病で、下の叔母の一家が来る。叔母の息子は「小蘭」といい、一緒に遊び、本を見せてもらう。一昨年も来たことがあるというが、私の記憶にはなかった。

祖母が死んだ日は雨で、わたしは甕の蓋をかぶって遊んでいて、父に蹴飛ば

された。家の人はみな白い着物で、祖母は長い板の上で寝ていた。「これから後、祖母はすぐに死んだ」。

祖母の死で、たくさんの親戚が来た。友達ができて、家の中を見てまわり、外に出て、初めて河に行った。南兵營の前を通り、盆栽があり、洋館があり、河に出た。舟も見た。対岸は柳の林であった。「祖母の死で、私は賢くなった」。

祖母の死後、祖父に詩を習うようになった。全部口移しであった。客があると祖父はわたしを読んで暗誦させた。詩の講義もしてもらった。

井戸に子豚が落ちたら、祖父はそれを赤土で捲いて焼いて食べさせてくれた。アヒルが落ちてでも食べた。わたしはアヒルを追って井戸に落とそうとした。

第四章では、「前庭」の人々が描かれる。「私の家の前庭は荒涼としていた」というフレーズが繰り返し使われる。¹⁶

前庭にはヨモギが生えていた。風の日も、雨の日も、晴れた日も、この前庭は荒涼としていた。前庭には古い煉瓦、壊れた甕、豚の飼料桶、鋤の先が晒されていた。甕の下にはワラジムシがいて、桶にはキノコがはえていた。

私の家は表門を入ると、東側の壁に三間続きの棟があり、豚飼いに貸していた。西側の三間続きの棟は家の米倉で、鼠がたくさんいた。三間の粉挽き場もあり、豚飼いに貸していた。三間の藁葺のオンボロ家もあり、雨が降ると屋根にキノコが出た。家の住人がキノコを取っていると、周囲の人々は羨ましがった。藁葺のオンボロ家は豆素麵を作る人に貸していた。彼らはキノコを食べる時、豆素麵と一緒に食べていた。素麵屋の人々は毎日歌を歌いながら豆素麵を作っていた。藁葺のオンボロ家は傾いてゆき、風が吹くときしみ、雨が降るときしみ、風も雨もなくても、夜になるときしんだ。家が壊れそうなのに住人は警戒していなかった。

祖父は前からその家を取り壊したいと思っていたが、彼らが何度も引き留め、それで思いとどまっていたのである。

この家が将来倒れるかどうか、あるいは不幸が起こるかどうかについては、皆それはたいそう先のことで、考える必要はないと思っていた。¹⁷

豚飼いの一家では、いつも「秦月空」を歌い胡弓を弾く者がいた。粉挽きは拍子木を叩いて歌った。素麵屋は「五更天」を歌っていた。

彼らはつまりこんな人たちであった。彼らは光明がどこにあるかを知らない、しかし彼らは確かに寒さが身に降りかかることを感じていて、その寒さを撃退したかったが、そのために悲哀がもたらされた。¹⁸

藁葺のオンボロ家の横には馬方の一家が住んでいた。神おろしが好きで、しょっちゅう太鼓の音、歌声がしていた。年中病気のお婆さんのためであった。お婆さんには二人の息子がいて、その嫁もいた。孫二人もいた。嫁同士のいざこざが絶えなかった。

第五章では、「胡家の団円媳婦」が描かれる。¹⁹

胡家に団円媳婦が来た。みな見にゆく。十四歳で、大きな体で、ご飯を三杯も食べたという。私は井戸端で媳婦に会う。笑顔を見せて、本当は十二歳であるという。二、三日して胡家のお姑による折檻が始まり、媳婦の悲鳴が聞こえる。祖父はやめるよう言うが、ますます激しくなり、媳婦の泣き声が続く。夜毎の神おろしが一冬続き、媳婦は病気になる。いろいろな人がまじないや処方を主張する。「雲遊真人」なるおみくじ師に五十吊銭を払ってくじをひくお姑。

（あの団円媳婦は、さらに殴ろうにも、耐えられなくなった。

（もしも団円媳婦が来たばかりの頃であったら、まず彼女をつかまえて、ひとしきり殴ってからの話だった。お姑は自分で茶碗をおつけても、団円媳婦をつかまえて殴り、彼女が針一本なくしても、団円媳婦をつかまえて殴り、彼女がつかずいて転び、ズボンの膝に穴をあけても、やはり団円媳婦をつかまえて殴った。ようするに、彼女は思い通りにならないことがあると、その手で人を殴りたいと思った。誰を殴るのか、誰だと彼女が大いに殴ることができるか。そこで団円媳婦ということになる。

（母がいるものは、彼女は殴れなかった。彼女自身の息子も殴れなかった。猫を殴ると、猫がいなくなるのを心配した。犬を殴ると、犬が逃げてゆくの心配した。豚を殴ると、豚の目方が減るのを心配した。鶏を殴ると、鶏が卵を産まなくなるのを心配した。

（しかしこの団円媳婦は、一発殴ると飯を食べられなくなった。飯を食べられなくなっても大したことはない、重湯をたくさん飲ませればよい、いずれにせよ、重湯は残っても豚にやればよいのである。²⁰

（そして彼女は多くの困難にぶち当たり、それをすべて克服してきた。彼女は歯を食いしばり、涙をこらえ、罵りたくても罵ることができず、殴りたくても殴ることができなかった。泣きたくても、泣くのをやめた。限らない傷心、限らない悲哀が、しばしば一緒に彼女の心の中におとずれた。彼女は思った、前世で良いことをしなかったので、この世で彼女にめぐって来たのかもしれない。そうでなければ、なぜ団円媳婦の命さえもなくなるのか。彼女は考えてみた、彼女は生涯で悪いことはしたことがない、心やさしく、にこやかで、すべてのことで自分が損をして、人に譲ってきた。²¹

媳婦は、昼は熱を出し、夜は寝言で「家に帰りたい」と言い続ける。「亡者がついているに違いない」と思ったお姑と家族は神おろしをおこなう。人々の見ている前で、大きな甕で媳婦に湯を使わせる。

夕方、媳婦は甕の熱湯に漬けられる。周囲で見ている者たちは、けしかけたかと思えば、憐れんだりする。媳婦は煮え湯に三度漬けられ、一度やけどし、一度気絶した。その後七日間昏睡状態になる。巫女にされ、紙の人間に着物を着せ、焼く。媳婦のおさがが落ちる。お姑は、媳婦は妖怪に違いないと思う。その後媳婦は死ぬ。埋葬に参加した者には料理が振舞われた。

胡家の上の孫の嫁は男と駆け落ちした。お婆さんは死んだ。一人の息子の嫁は片目を潰し、もう一人の息子の嫁は半気違いになり、胡一家は人々に見向きもされなくなる。

竜王廟の東の隅に東大橋があり、団円媳婦が白兔になって現れるという。

第六章では、「有二伯」が描かれる。²²

「有二伯は本当に変わっていた」。私が何か食べていて、分けてあげないと罵り、分けてあげると、「そんな物は食えない。お前たちが食べろ」と言う。有二伯は雀や赤犬と話をするのが好きだった。大昴星について尋ねても、「貧乏人に天文はいらない」と言って、答えない。煉瓦のかけらにつまずくと、煉瓦に説教する。雀や燕に糞を落とされる。彼は羊の肉を食べない。

有二伯は三十年前に私の家に来た。三十半ばのときで、今は六十半ばである。幼名を「有子」といったが、子供たちから「有二子」「大有子」「小有子」といつてからかわれる。日露戦争でロシア兵が来たときの話では、自分がいかに大胆であったか話す。祖父と同じ話になると、臆病になり、怖がっている。彼の寝具は悲惨で、自分で繕っていた。彼は決まった住まいがなかった。

彼の服装は中途半端で、靴は爪先の底が抜けているか、踵が欠けていた。

私は納戸で有二伯が盗みをしている現場に出くわした。銅の徳利、米、錫の火鍋、銅貨、キセルの吸い口等。口止めされる。有二伯と一緒に公園を歩いて、手品やサーカスを見たくても、「金がない」と言って、見せてくれない。有二伯は浴槽を盗むが、見つかり、人々にからかわれる。「貧乏人といっばかにするな。貧乏人には貧乏人なりの価値があるのだ」と言い返す。

ある日、有二伯は私の父親に殴られ、首を吊ろうとするが、死ねない。今度は井戸に飛び込もうとするが、死ねない。彼は人々の物笑いのたねになる。「有二伯はやはり生きていた」。

有二伯は夜中になると独り言を始めた。「わしが『死』を怖がっているだど？何を言うか……このごろはまったくでたらめだ」「兎め、兎め」。私が尋ねると「お前の家にはろくな奴はいない。みんな鼠だ」と怒り出す。私にはわけが分からない。

第七章では、「口のゆがんだ馮」（馮歪嘴子）が描かれる。²³

粉挽き場に口のゆがんだ馮が住んでいた。裏庭の土塀の脇にはカボチャ、冬瓜が植えてあった。粉挽き場の窓にはキュウリが実をつけていた。馮は栗餅を作って売っていた。

ある日、私が粉挽き場に入ると、オンドルに女と子供が寝ていた。馮は世帯をもったと言う。祖父は寝る場所として、粉挽き場のとなりの小屋をあてがう。馮の主人である王四は馮を罵る。馮一家は粉挽き場の南側のアンペラ小屋へ移る。馮の妻は王姉さん（王姐）と呼ばれていた、街でも評判の女性だった。周囲の人々は馮一家を監視し、いろいろな噂を流した。馮は仕事が終わると食べ物を買ひ、子供に持って帰った。数年して二人目の子供ができる。しかし王姉さんはどんどん痩せてゆく。秋になり、王姉さんは死ぬ。周囲の者は、馮が参って乱れるのを待っていた。

（しかし口のまがった馮自身は、周りの者が見ているほどは絶望していなかった。まるで彼は、生きてゆくのにとても自信があるように、穴でも開けられたような絶望を感じていないだけでなく、二人の子供を見ると、彼はかえって落ち着いてきた。彼は、この世界で、必ず根を張り、しっかりと成長するであろうと思っていた。彼は、彼自身にそのような能力があるかどうかに関わらず、ほかの人も皆そうしているのを見て、そうしなければならなかったと思っていた。

（そして彼は、いつもどおりこの世界に生き、いつもどおりその責任を負っていた。

（そして彼は自ら生まれたばかりの子供に食べさせ、箸を使って食べさせ、子供が食べないと、匙を使って食べさせた。

（下の子供に食べさせ、上の子供を連れて、水を汲むべきときには水を汲み、粉を挽くべきときには粉を挽いた。²⁴

下の息子も育っていったが、育つにつれて目ばかり大きくなり、腕や足は細くなっていった。

（口のゆがんだ馮の息子を見ても、決して人に時間の観念を与えることはなかった。大人はつねに子供の身で時間に触れることを喜ぶ。しかし口のゆがんだ馮の息子は人にこの満足を与えることができなかった。それというのも、二ヶ月前に見たときと二ヶ月後に見たときで、やはり同じ大きさであったからである。これでは裏庭に行ってキュウリを見た方がまだよい。キュウリは三月に種を蒔くと、四月には蔓が伸び、五月には花が咲き、五月の末には大きなキュウリが食べられる。

（しかし口のまがった馮は、そうは考えていなかった。彼は自分の息子は日一日と大きくなっていると考えていた。²⁵

エピローグ

このように、私が書いたものは、美しい物語といったものは何もないが、ただ、それらが私の幼い頃の記憶の中に満ちており、忘れることができず、どうしても忘れることができないので、ここに記したものである。²⁶

4 筆者（後藤）の『呼蘭河伝』読後の所感

筆者の「呼蘭河伝」に対する視点を設けるために、筆者の作品読後の所感を述べてみることにする。

まず、呼蘭河という街の、文化的に未開の、あるいは迷信や風俗風習に支配される人々の、当時としてはごく普通で当たり前であったであろうが、今日の眼、今日の人権感覚からすれば、愚かしいとも思われる行動、生態が描かれている。たとえば、通りの泥の穴に校長の息子が落ちた時の人々の反応、穴を埋

めようとしない人々、身体に障害を持つ人たちへの対応、麻花を奪い合う母子、団円媳婦を折檻、虐待する胡家の人々、などである。

人の死のあっけなさ、それに対する作者の醒めた目、街の人々の「生死」に対する醒めた態度。たとえば街の女を奪い合う染物屋の小僧たち、飢え死にする紙屋の父なし子、葬儀屋の職人たち、祖母の死、王姉さんの死など。ただ、作者は、一面出来事を淡々と述べているようで、その愚かしいとも言える人々の行動に対しても、醒めているようでもあるが、一種の愛情、愛着のようなものを持って書かれているように思われるところもある。たとえば、街の人々が泥穴を埋めない理由など。

動物、昆虫、植物、自然、天体などの描写の細かさ、美しさ。生き生きしたものへの関心と注意が感じられる。たとえば、家の裏庭の蜂、蝶、トンボ、バッタ、小鳥、サクランボの木、キュウリ、カボチャ、バラの花、前庭のヨモギ、夕焼け雲、河の南岸に帰るカラスの群れ、夜空の星星、藁葺小屋のキノコ、胡家に嫁いだ直後の団円媳婦、二十歳のころの王姉さんなど。

虐げられている者、蔑まれている者に対する感情、同情があるように思われる。葬儀屋の職人たちの身なりや生活、それとは裏腹の彼らが作り出すきらびやかな紙の人形、胡家で虐待されて死ぬ団円媳婦、有二伯、口のまがった馮とその妻である王姉さん、その子供たちのエピソードなど。

封建的共同体内部での風俗、しきたり、年中行事、その中での女性の境遇が描かれている。またそれらに経済的な面からも分析を加えている。神おろし、灯籠流し、その当日の七月十五日に生まれた子供は嫁がもらえない、嫁にいけないと考えられていること、金持ちは別であること、村芝居、それに合わせて行なわれる男女の見合い、「指腹婚」で貧乏になった男の家に嫁いだ女の境遇、娘娘廟大祭での関帝廟、娘娘廟の参拝、胡家の者の顔色を見ながら有料のおみくじやまじないをふっかける「遊雲真人」なるおみくじ師と、彼に大金を払っておみくじを買う胡家のお姑、など。

胡家のお姑の団円媳婦への折檻、虐待について。この章節では、当時幼少であった作者が知る由もない、胡家のお姑の内面、心理状態、すなわち彼女の感情、考え、およびそれを表すセリフが、作者の想像、脚色によって延々と描写される。特に、お姑がどうしても媳婦を殴り、虐待せずにはいられない心理状態、その経済的背景、殴っても経済的損失がないこと、なども描かれている。それはちょうど、魯迅の「阿Q正伝」中の阿Qが、普段は街の人々からバカにされているが、自分より弱い尼さんを見ると、からかい、いじめるように、人から差別抑圧を受けている者が、より弱い者に対して差別抑圧をしたがるとい

う、団円媳婦に虐待を加えるお姑自身も被抑圧者であるという、「差別の重層構造」のようなものも見える。作者は、このお姑と団円媳婦のエピソードに、特に強い感情を抱いていたのではないかと推測される。²⁷

作者本人が意図していたかどうかは定かではないが、この作品は、見方によっては、封建的な迷信や思想、封建的経済、封建的家族制度、その中で抑圧された女性の実態を明らかにし、反封建、女性解放をも志向する内容を含んでいる、とも読める。

5 平石淑子『蕭紅研究—その生涯と作品世界』より

蕭紅の研究者である平石淑子氏の『蕭紅—その生涯と作品世界』（汲古書院、2008年）より、「呼蘭河伝」の評価と分析に関する内容を見てゆく。

「序章 蕭紅に対する評価の変遷」では、蕭紅に対する評価の歴史を四つの時期に分けて述べている。（一）確立期（1935年～1942年）では、1935年執筆の『生死場』の序文を書いた魯迅、後記を書いた胡風の見方とその影響力を指摘している。（二）回想期、及び文学史的評価の開始期（1942年～1976年）では、1941年1月22日の蕭紅の死後、多くの友人、知人たちが蕭紅を回想したことが述べられ、その中で白朗、緑川英子の回想について触れられる。

蕭紅をよく知る白朗が、彼女の夭逝の要因の一つとして、抗日戦争によって余儀なくされた苦難の放浪生活のほかにその結婚生活における不幸をあげたことは、後の蕭紅の生涯、あるいは蕭紅の作品に対する人々の印象、あるいは理解に大きな影響を持つこととなる。

次いで、重慶でやはり蕭紅と共同生活の経験をもつ緑川英子（長谷川テル、1912～47）は、白朗よりも更に明確に、蕭紅の憂鬱の原因を「男性上位の封建的遺産」と断言する。²⁸

1940年に脱稿した「呼蘭河伝」に対して、1946年に茅盾が「序文」を書いているが、この「序文」について述べられる。

茅盾がいう「挽回できなくなったすべて」とは何を指すのだろうか。当時社会的影響力の大きかった彼が、一生彼女につきまとったいわゆる寂寞が、彼女の「消極性」から生まれたものであること、その「消極性」が男性と同居する中で受けた「感情」面での深い傷に基づくものであり、結果として彼女

を襲った様々の不幸の原因となったということを人々に強く印象づけた。²⁹

また1947年に発表された駱賓基の「蕭紅小伝」にも触れられている。

駱賓基は「呼蘭河伝」を蕭紅の自伝であるとし、それに基づいて彼女の幼年期を再現して見せる。そして幼年期に家族の愛情を体験できなかったことが、後に愛情に対する強いトラウマとなって彼女を苛んだとし、蕭紅の孤独を強調する。³⁰

茅盾、駱賓基ら友人たちの以上の文章及び「呼蘭河伝」によって、「寂寞」にうちひしがれながら、しかし力をふりしぼってそれに立ち向かっていこうとする健気な薄幸の女性、蕭紅の物語は完成されたといってよい。そして彼女の悲劇と不幸の背景に、封建的な家庭環境と男女の力関係、そして外国人侵略者の影が見えたところで、彼女は作品だけでなく、その生涯に関しても普遍性を獲得した。³¹

蕭紅の作品のもつ「反日」作用について、次のように述べている。

総じていえば、「生死場」の持つ「反日」作用を高く評価したいという時代的希求が高まるほどに、それとは完全に風格の異なる後期の作品をどう解釈するかが最大の問題となった。それはいい換えれば、当時の中国において「生死場」が中国自身をふり返り、その歴史の正当性を主張する上でどれほど重要な作品であったかを意味している。蕭紅における「反日（抗日）」の意味を強調するあまり、それとは風格の異なる後期の作品の解釈を巡って愛情面における個人的な不幸の影響が強調され、結局蕭紅は、侵略者の暴力と男性の権力とに翻弄された悲劇のヒロインとして同情を集めることとなった。またそれと比例して、彼女と関わった男性がほぼ例外なく、それと相対的に貶められたことも記しておかねばならない。³²

（三）実証、及び第一展開期（1976年～1980年代中期）では、文革が終了し、多くの文芸関係者、作家によって回想録が発表され、実証的調査による新たな研究活動が展開された、としている。「その過程で多くの新しい資料や証言が獲得されたことは蕭紅研究にとっては大きな収穫であった。それらの実証的調査、研究の成果として、これまで不必要なまでに増幅されてきた蕭紅の悲

劇の物語に、次第に修正が加えられていく」としている。³³

(四) 第二展開期(1980年代中期以降)では、実証的研究が一段落し、作品研究の時期が訪れた、とする。1980年代、文学史において、「東北淪陷区文学」「国防文学」「東北流亡文学」などの概念が提起される。1990年代に入り、「郷土文学」という概念で東北作家群を評価しようとする動きが現れたという。

『中国新文学發展史』(1991年8月、高等院校教科書)は、葉紫、蕭軍、端木らの文学は、都会に住んで故郷を懐かしむような「狭義の郷土文学」とは異なり、ソ連と左翼文学の影響を受けながら農村の深刻な現実を描いた真の郷土文学であると評価する。そういった観点に立つことにより、これまで蕭紅の「寂寞」と消極性の裏付けとして専ら読まれてきた「呼蘭河伝」を、王統照の「山雨」や沈從文の「辺城」と並立させ、「二十年代の郷土文学の審美的傾向を成熟した風格に發展させた」とし、蕭紅を、苦難の生涯であったとしながらも「東北作家群の中で最も詩人的体質を有した才女」で「魯迅と二十年代の抒情型の郷土作家の後を受け、その文学形式を新しい高みへと押し上げた」と高く評価する。「郷土文学」は決して新しい概念ではなかったが、ここにおいて初めて、「呼蘭河伝」の文学史上における肯定的評価が成立した。しかしこの評価は東北とは無関係の「馬伯楽」には適用されない。³⁴

1980年代後半から中国に起こった「女権主義」にも言及される。「女権主義の立場から最も早く蕭紅に光を当てたものが孟悦、戴錦華『浮出歴史地表』(1989年7月、河南人民出版社)である」という。

著者は蕭紅の生涯を分析した上で、家族の愛情の希薄さは、彼女に想像と現実という二重の世界の中で生きることを強いた、とし、蕭紅は想像の世界でのみ自由に快活で純粹であり得たとする。抗戦勃発後間もなく、彼女は「自分が民族、愛情、女性という三重の危機に陥っていること、主導的文化陣営と女性としての自我の間に緊迫した選択を迫られていること」に気づいた。前者を選択することが最も望まれ、また最も安全で平穏な生き方であったが、そのためには性的役割(ジェンダー)に従わなければならなかった。後者を選択することは冒険であり、孤軍奮闘が予測されたが、蕭紅は敢えて後者を選んだのだという。(中略)陣営に承認されていないことは、蕭紅の創作活動に大きな利点ともなった。「蕭軍が蕭紅に妻としての役割を求めな

かったと何度弁明しても、蕭紅は彼と友人たちの関係の中では妻として存在しており、「ある意味で蕭軍に養われる女性」であった。彼女が社会と直接交渉することを阻んだことにより、彼女は「中国三十年代のイデオロギーの周辺に位置」することとなり、そのため彼女の創造力はマルクス主義理論を主導とする、当時の知識界共通の叙事パターンの制限を受けることを免れ、よってその作品は真実で原初的なままであり得た、とする。また「男性の従属物とされる屈辱を受けた」ことにより、彼女は中国の過去、現在、未来に対して男性たちのように楽観的にはなれず、むしろ抗日の激流の下を緩やかに流れている暗流に目を向けたとする指摘は、筆者が蕭紅に対して抱いているイメージと一致する。またこの指摘により、「生死場」から「呼蘭河伝」に至る蕭紅の一連の創作活動は初めて一連の意識的な営みとして理解される可能性を持ったといえる。³⁵

「第二章 初期文学活動」では、1933年10月に出版された蕭軍と蕭紅共著の短編小説集『跋涉』に収録されている作品に見えるものについて、次のように述べている。

こういった日常的な風景が作品の各所に点在することで、本来非日常なものと思われる悲劇が、実は彼らの日常の一部として存在することが印象づけられていく。日常であることにより、人々はそれに慣らされ、抗うことを忘れていく。降りかかるものは降りかかるものとして受容することが彼らの「生」の軌跡となる。死ぬなら死ななくてはならないし、死なないなら死ぬまで生きていくしかない。それは人であってもなくても、東北の大地に生きるあらゆる生命に課せられた宿命とでもいうべきものだ。そういった考え方は「生死場」に受け継がれるだけでなく、「呼蘭河伝」に至るまでの蕭紅の作品全体を貫いている。（中略）没落しかけていたとはいえ、父親の経歴から見て、その地方ではまだ相当の力を有していたと思われる旧家の娘としての生活から、あつという間に商市街というスラムでのその日暮らしの生活に「転落」した経験は決して小さなものではあるまい。³⁶

蕭軍との関係とその影響について、次のように述べている。

彼女が作家として出発したのも、生活や自立のためというよりは、蕭紅がもともと文章を書くことへの嗜好と才能を持っていたことに加えて、蕭軍とい

う才能ある若者と出会ったこと、そして彼の文章を清書する中で作品の書き方を会得していったことによるのだろう。蕭紅が社会の被抑圧者に目を向け、彼等の苦しみを作品のテーマに据えようとしたのは、もちろん自身が直面した危機の記憶が、彼等の人としての尊厳や存在の危機に対して共感を持たせたことと無縁ではあり得ない。だがそれを文学の中でどう扱い、どう表現していくかに関しては、まず蕭軍の志向が大きく影響したに違いないし、蕭軍とつきあいのあった人々の活動、考えも少なからず影響を及ぼしたに違いない。蕭紅は創作活動と同時並行的に社会経験を積んでいった。創作が先行し社会経験がその後づけをしていくということもあり得ただろう。その結果、蕭軍たちには見えないものが彼女には見えた、ということもあったかもしれない。それが後々彼女自身の文学を色づけていったのではないか。³⁷

蕭軍の蕭紅に対する「男性優位」の態度、二人の感情的矛盾について、次のように述べている。

…しかし蕭軍には蕭紅との生活によって自分は文学活動に腰を据える決意をしたのであり、蕭紅を創作の道に導いたのは自分であるという自負が強くある。家事の全てを蕭紅に任せた上に自分の原稿の清書という雑務までさせていても、蕭軍には蕭紅と一緒に歩いてきた、彼女を支えてきたという思いがあった。過去を反芻することは、蕭軍にとって、自分たちの生活の正当性を確認する重要な作業だったが、創作活動を通じて精神的に成長しつつあった蕭紅にとって、何かにつけて未熟な頃の自分を持ち出され、確認させられるような行為はむしろ屈辱的であり、永遠に保護者と被保護者の関係に二人を置こうとする、妻としての自分の成長を阻止しようとする男性のエゴイズムとしか映らなかった。そしてそれが修復される機会はずいぶんなく、二人は別離のときを迎えねばならない。³⁸

「第四章 後期文学活動」では、「呼蘭河伝」に対するこれまでの評価では問題にされてこなかったと思われる、新たな視点が提示される。

茅盾が「寂寞」をキーワードとしてこの作品を評したこと（「『呼蘭河伝』序」）、彼のこの意見が「呼蘭河伝」に対するこれまでの内外の見方をほぼ代表するといつてよいこと、更にそれに影響され、「呼蘭河伝」全体を覆う、郷土の香りに満ちたしっとりとしたエピソードの数々が、彼女の覆い隠

せぬ寂寞の現れとして読まれ、蕭紅の悲劇の助長に拍車をかけることになったことについてはすでに序章で述べたとおりである。だが近年、多くの人々の努力や証言によって蕭紅の幼年時代に関する事実が明らかになり、更に「呼蘭河伝」の前作ともいえる作品を併せて読むことにより、この作品が必ずしも蕭紅の「自伝」ではなく、むしろ自伝と見せて巧みに創り上げられたフィクションであることがわかるのである。前作に関する言及がこれまでなかったわけではないが、「呼蘭河伝」の作品としての重みを重視しすぎたためか、あるいは蕭紅の境遇への同情が勝ったためか、前作は「呼蘭河伝」に至る習作としての扱いしか受けてこなかった。また、この物語の舞台が蕭紅の生まれ故郷である実在の街「呼蘭」ではなく、「呼蘭河」という架空の町になっていることについても、筆者の知る限り問題にされたことはない。

（中略）全体を通した主人公はなく、骨組みとなるストーリーもない。散文と小説が組み合わせさったような不思議な構成に、まず読者は翻弄され、そこに書かれたすべてが事実そのものであるかのように思い込まれながら、彼女の世界に取り込まれていく。骨組みとなるストーリーを持たず、中心となる人物もないといった構成は、実は「生死場」から引き継がれてきたもので、蕭紅独自のスタイルといってよい。ところが「呼蘭河伝」からはいわゆる「抗日」の色彩が全く姿を消していることから、懐古に満ちたしっとりとした深い味わい、また市井の人々のつつまじやかな生活に向けられた作者の暖かくも鋭い観察力は認められながら、また蕭紅独特の優れた描写力も認められながら、なお相応の評価を与えられずに今日まで至っているといつてよい。しかしこの作品のあとに書かれた「馬伯楽」のボリュームや、そこに後に述べるような新たなスタイル構築への意欲が見出されることなどを見れば、「呼蘭河伝」を書いたときの蕭紅の精神状態はむしろ充実しており、必ずしも矛盾がいうような「寂寞」に押しつぶされていたものとも思えない。むしろ計算し尽した一つの挑戦とすらいいてもいいのではないだろうか。³⁹

作品中に描かれる呼蘭河の街の様子、あるいは小学校、神おろし、灯籠流し、村芝居、娘娘大祭について、寺岡健次郎編『濱江省呼蘭県事情』（1936年）、『満洲国の風俗』（満洲事情案内所、1935年）を引用して、次のように述べている。

総じていえば、「呼蘭河伝」は精神的な面において実在の呼蘭を強く意識しており、そこに重点を置こうとするために、現実面に関してはある程度の脚

色が施されているように思われる。⁴⁰

作品の第三章に描かれる祖父、祖母、第四章に描かれる「前庭」に間借りしている人々、第五章に描かれる胡一家と団円媳婦、第六章に描かれる有二伯、第七章に描かれる馮歪嘴子について、さらに蕭紅がこの物語を書いた理由について、述べられる。

有二伯にしろ馮歪嘴子にしろ、同じ人物をモデルにした他作品との比較検証を通じて、「呼蘭河伝」が必ずしも事実そのままではないこと、作者が意図的に手を加えた痕跡が見えてくる。⁴¹

これまで「呼蘭河伝」を肯定的に批評しようとする人々は、北の大地の豊かな風土とそこに暮らす人々の古来変わることのない生活が蕭紅独特の美しい表現によって描き出され、彼らの封建制が暴き出された、という点にこの作品の価値を求めた。そして作品に漂うノスタルジックな哀愁を蕭紅の望郷の念に起因すると解釈してきた。（中略）だが特に有二伯と馮歪嘴子の物語について見られたように、この作品が蕭紅の幼い頃のノスタルジーだけを基盤に書かれたものでないことは明らかだ。（中略）蕭紅は馮歪嘴子の希望を描くために、この物語を書いたのではないだろうか。大きな泥の坑がどれほど危険で、どれほどじゃまなものであっても、それを埋めようとはいい出さない人々、古い家の中で、古いものに囲まれながら安穩に生きている善良な家族。そこに沈殿する空気を蕭紅は「私の家の前庭は荒涼としていた」と表現する。その空気を一掃するためにまず選ばれたのが幼い団円媳婦であった。彼女が彼女の挑戦に敗れたことは、しかし無駄ではなかった。彼女は死後、人々の中にこれまで考えられもしなかったさざ波を起こしていった。しかし作者はその次に第二の挑戦者馮歪嘴子の物語を配さない。落ちぶれた知識人有二伯の物語を挿入することにより、滅び行く者の姿を示してみせた。そのために「家族以外の人」の有二伯は旧知識人の風貌を与えられた。彼も首を吊ろうとしたり、井戸に飛び込もうとしたりして、「人」としての存在をアピールするが、彼の行為は何も生み出さない。滅び行く者の哀愁がすでに示されていればこそ、馮歪嘴子の挑戦の成果はより明るく、力強く、読者の印象に刻まれる。一方この三人の登場人物の行為の結末が次第に明るい方向に向かっていることは、馮歪嘴子の希望をより明るく際立たせることを助けている。団円媳婦は死んだが、有二伯は生き続け、馮歪嘴子は妻を亡くす

という犠牲は払わねばならなかったものの、二人の息子と共に生きていく。息子が生きていることにより、未来に希望は引き継がれていく。彼の心の中に確固として根付いた「他人がそうしているのだから自分もそうしなければ」という信念は、「人」として認められなかった彼が、「人」として生きようとする事への輝かしい決意表明である。⁴²

6 まとめ

「はじめに」で述べたように、今回筆者が「呼蘭河伝」に取り組むにあたり、筆者自身の、毎年訪れるハルピンという街、それに隣接する呼蘭に対する親近感、北東アジア地域の文化交流、自分の郷土を文学作品としてどう表現するか、という関心から作品にアプローチしているため、その言説は、蕭紅の研究者である平石淑子氏の作家、作品分析には遠く及ばないことは言うまでもなく、また蕭紅に関する新たな事実を発見してもいないが、ここでは、蕭紅がどうして呼蘭を文学作品として描こうとしたのか、どのように描いているか、その動機と方法について、筆者なりに考えたことを述べてみることにする。

蕭紅は、日本軍による満州事変、満州国建国を経て、1934年に東北ハルピンを離れ、青島、上海、東京、武漢、臨汾、西安、重慶、香港を転々とした。その放浪生活の中で、故郷呼蘭に対する望郷の念はあったであろう。しかしそれは、単純に自分の生まれ故郷が懐かしい、というものではなく、例えば「祖母の死で、私は賢くなった」と述べているように、幼年時代の体験が自分に与えた影響、自分の成長、いわば自己形成として述べられていることから、呼蘭という街で幼年期に見聞きしたこと、体験したことが、良い意味でも悪い意味でも現在の自分を形作っている、そういう意味で「自分の原点は呼蘭だ」という思いがあり、現在の自分の原点を確認しておきたいという思い、呼蘭についての記憶を整理し、創作や脚色をも加えて、自分の納得のいく形にまとめておきたい、という思いがあったのではなかろうか。また、蕭紅の「呼蘭河伝」執筆は、27歳から29歳の半ばにかけて執筆されている。年齢的に言っても、「論語」の「三十而立」ではないが、それまでは自分が生きること、目の前の事に対応することで精一杯であった彼女が、気持ちの面で、これまでの自分を振り返って見て、幼年期の体験、記憶をまとめておきたかったということはあるのではないだろうか。

ではその「自分の納得のいく形」とは、どういうものであったのか。呼蘭での体験、記憶を文学作品として描き出す中で、「女性」を書くことに力がこめ

られている。それには、生母との死別、父、義母、祖母との関係、幼年期に目撃したであろう呼蘭の街の女性たちの境遇、婚約者王恩甲との同棲と破綻、ハルピンでの妓楼に売られる一歩手前の生活、出産した子供を人手に渡したこと、蕭軍との同棲、彼から文学面の影響を受けつつも、彼の男尊女卑的な態度、感情面での矛盾と離別、流産などの実体験が背景となっているであろう。迷信の支配、封建的家族制度の中で、人として扱われない女性たち、特に、虐待される団圓媳婦、「指腹婚」で縁組したが、相手の男性の家が没落したため悪く言われ、しかたなく嫁いでも、家の者にいびられ、実家の実母からも「運命だから我慢するよう」言われ、井戸に飛び込む女性、関帝廟の凶暴な容貌の男の人形と、娘娘廟の温厚そうな娘娘の人形の由来、媳婦を虐待せずにはおれない心理状態の胡家のお姑など、作品に登場する女性たち、あるいは当時の女性の境遇に感情移入し、自ずと筆に力がこめられているように見える。胡家のお姑の描写に至っては、本来知る由もない彼女の内面心理に立ち入った描写となっており、他の章節の描写は散文のようであるが、この節の文章だけは小説のようになっている。分量も字数にして約16400字と、他の節に比べて格段に多い。

女性以外にも、街の人々から見下されたり、蔑まれているような人々を、醒めた目で淡々と描きつつも、その一方で、そのような人々の中からも、ある者はひっそりとつつましく、ある者は逞しく「生き続けようとする」姿を見出しているように思われる。モヤシ売りの王後家、口のゆがんだ馮などがそうである。葬儀屋の職人たち、藁葺のオンボロ家の素麺屋の人々、有二伯などは、どちらにもとれる描き方に見える。

蕭紅は、1938年1月に雑誌『七月』主催の座談会「抗戦以後的文芸活動動態的展望」（抗戦以後の文芸活動動態と展望）に参加し、その中で「作家と生活問題」というテーマについて、「私たちは決して生活から離れていないと思います。たとえば警報で身を隠す、これも戦時の生活ですが、私たちが把握できていないだけです」「たとえば、私たちの大家のおばさんが、警報が鳴るのを聞いて震え、彼女の子供のことを心配する、これも戦時の生活の現象でしょう？」と発言している。⁴³ 抗日戦争下で手に武器を取り、勇敢に抗日闘争に立ち上がる人々の姿も一つの「抗日」の表現であるが、そうでない人々もいる、そういうふうに行動できない人たちもいる、そういった人たちの存在が気になる、そういった人たちの姿をも描くことが大切だと蕭紅は思っていたのではなかろうか。この座談会を主催し、雑誌「七月」の編集者でもあった胡風は、抗日戦争中の文学傾向として、主観公式主義、客観主義、スローガン主義に反対

したが、蕭紅も胡風も、「抗日」という歴史上の大目標に対しては、当然それを目指すものであったが、その文学上の方法においては、政治への従属、世論形成のための政治的な動員よりは、本当に自分の内面から湧き出す言葉、見方、表現の方を重視し、大切にしたいか。蕭紅、蕭軍、胡風はいずれも晩年の魯迅の周りに居た作家、文学者であるが、彼らは当時の歴史的、政治的な目標、方向性を明確に持ちつつも、文学上の方法としては、政治的動員、組織の活動よりは、作家個人の内面の活動、内面の世界に重きを置く点において、また自分の身のまわりの生活に題材を見出すという点においても、共有するものをもっていたのかもしれない。⁴⁴

注

- 1 蕭紅の経歴については、『中国現代文学選集7 抗日期文学集I』（平凡社、1962年）所収の立間祥介訳「呼蘭河の物語」の「解説」、丸山昇、伊藤虎丸、新村徹編『中国現代文学事典』（東京堂出版、1985年）121～123頁の「蕭紅」の項、平石淑子著『蕭紅研究—その生涯と作品世界』（汲古書院、2008年。以下、平石『蕭紅研究』と略記する）の年表と蕭紅の経歴を述べた箇所を参照した。
- 2 「呼蘭河伝」は1938年秋に書き始められ、1940年12月20日に脱稿。香港の『星島日報』に1940年9月1日から同年12月27日まで連載された。「呼蘭河伝」の内容要約にあたっては、テキストとして、林賢治編注『1932～1942蕭紅十年集（下）』（人民文学出版社、2009年。以下『蕭紅十年集』と略記する）を使用した。また前掲『中国現代文学選集7 抗日期文学集I』所収の立間祥介訳「呼蘭河の物語」を参照した。
- 3 前掲、『蕭紅十年集』658～683頁。
- 4 同上、658頁。
- 5 同上、660頁。
- 6 同上、673～674頁。
- 7 同上、674頁。
- 8 同上、683頁。
- 9 同上、683～701頁。
- 10 同上、685頁。
- 11 同上、687頁。本稿でテキストとしている『蕭紅十年集』では、他の版にある「大人則都看出了神了、一声不響、陶醉在灯光河色之中」という一文が抜けている。
- 12 同上、699～700頁。
- 13 同上、701～723頁。
- 14 同上、702頁。
- 15 同上、702頁。
- 16 同上、723～736頁。
- 17 同上、730頁。
- 18 同上、731頁。
- 19 同上、736～769頁。
- 20 同上、757～758頁。『蕭紅十年集』では、「有娘的、……打鵝、怕鵝不下蛋」の次に続く段落が「（可是這小团円媳婦、一打也就喫不下飯去。……）」となっており、他の版にある一段落が抜けている。
- 21 同上、758頁。
- 22 同上、769～788頁。
- 23 同上、788～809頁。

蕭紅「呼蘭河伝」について

- 24 同上、807～808頁。
- 25 同上、809頁。
- 26 同上、810頁。
- 27 尾坂徳司氏は、第四章の胡家のお姑と団円媳婦のエピソードについて、「…私は、蕭紅がこの描写に命を懸けているのではないかと思うのである。蕭紅は明らかに、女の受けている不当な処遇を記録することに、のめりこんでいる。『呼蘭河』の全構成は、このためにここで崩壊する。」と述べている。また尾坂氏は、蕭紅の「生死場」を読んだ感想として、「そして変った文体。文脈論理の上でいうと、欠落した部分をあちこちに散見するのだが、感覚的または情感的にとらえたと条理が一貫していて、全体的には欠けるところがないのである。」と、蕭紅作品の文体と構成について述べている。尾坂徳司著『蕭紅伝—ある中国女流作家の挫折—』（燎原書店、1983年）、7～8、301頁。
- 28 前掲、平石『蕭紅研究』9頁。
- 29 同上、14～15頁。
- 30 同上、15頁。
- 31 同上、16頁。
- 32 同上、18頁。
- 33 同上、19頁。
- 34 同上、23頁。
- 35 同上、24～25頁。
- 36 同上、88～89頁。
- 37 同上、97～98頁。
- 38 同上、170～171頁。
- 39 同上、236～237頁。
- 40 同上、243頁。
- 41 同上、265頁。
- 42 同上、265～266頁。
- 43 胡風編『七月』第7期（七月社、1938年1月）195～197頁。平石『蕭紅研究』275、298～299頁。
- 44 胡風は1954年1月の中央文学研究所における魯迅についての講話の中で、次のように述べている。「魯迅はかつて、彼が評論したものは、その多くが小さい問題だと言った。（中略）その実、小さいものを取り扱うというこの点が、まさに魯迅先生の基本的な戦闘方法なのである。彼はまさに小さな事、小さな問題を通して大きな問題を取り出して見せる。日常のこまごまとした事、普通の生活から原則問題と思想問題を指摘する。（中略）それはつまり、共通性は個性の中に含まれ、共通性は必ずや具体的なものの上に反映するということである。」胡風「關於魯迅的雜文（一）」『胡風全集』第6巻（湖北人民出版社、1999年）54～55頁。